

「主イエスと共にいた者」

マルコによる福音書 14章66-72節

森島 牧人 牧師

今日の聖書の場面は引き続き大祭司の屋敷の中庭です。連行される主イエスに遠く離れてついて来て人々に紛れて火にあたっていたペトロは、庭に出て来た屋敷の女中に二度、「あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいた」と言われます。突然のことにペトロはしどろもどろになりながら二度とも「何のことか分からない。」と言って逃れようとしています。ところが狼狽し否定する彼の言葉にガリラヤ独特の訛りが出てしまったことで、そんなことには無関心だったはずの居合わせた人々からも「確かに、お前はあの連中の仲間だ。ガリラヤの者だから。」と言われてしまったのです。追い詰められたペトロは呪いの言葉を口にしながら、自分はナザレのイエスの仲間ではないと必死で誓ったのでした。その時、再び雄鶏が鳴きます。主イエスの「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」との言葉を思い出したペトロは、激しく泣いたと聖書は記しています。

この場面でペトロは、「イエスを知らない」と言い、キリスト者にとって誇り以外の何ものでもないはずの「ナザレのイエスと共にいた者」ではないと、証明してしまったのです。主の傍で強い信仰を語っていた時も、主との関わりを否定したこの時も、彼は自分の言っている言葉の意味を理解していなかったのです。

しかしこの後、宣教に立ち上がった彼はコルネリウスに「わたしたちは、イエスがユダヤ人の住む地方、特にエルサレムでなされたことすべての証人です。」(使徒 10:39)と語っています。つまりキリスト者、信仰者とは「イエスと共にいる者」であると明言しているのです。

さてペトロが三度知らないと言った時に鳴いた夜明けの雄鶏。ルカ福音書には「ペトロは、『あなたの言うことは分からない』と言った。まだ言い終わらないうちに、突然鶏が鳴いた。主は振り向いてペトロを見つめられた。」(22:60・61)とあります。彼の三度目の否定の言葉を待っていたかのように鶏が鳴いたその時、ペトロは主の御言葉に目覚め、主の御臨在に気づいたのでした。

おそらく彼はこの夜明けの出来事を折に触れて説教で語り、主イエスに最も愛された者が短い間にやすやすとそれも三度も主イエスと福音を恥として捨てたことを思い起こして、この夜明けの涙と同じ涙を流したに違いありません。

しかし第二コリントに、「神の御心に適った悲しみは、取り消されることのない救いに通じる悔い改めを生じさせ、世の悲しみは死をもたらします。」(7:10)とありますが、これはペトロが繰り返し語っていたものをパウロが手紙に記したのではないかと思われるのです。

主イエスを売ったイスカリオテのユダは自責の念に駆られて死んで行きましたが、ペトロは主イエスの言葉を思い出して泣いたのでした。彼の中にあつた神の御心である主イエスの言葉が、救いの道に通じていたということに外なりません。

ガリラヤ湖畔での主の「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」との言葉に始まり、主と寝食を共にした三年半の間、彼はいつも主の言葉と共にあり、その中に生きていました。それがいつの間にか主の御言葉に基づかない、自分の正義感や信仰感を恃みとし、御自身の死と復活を予告される主を脇へお連れし諫め、主に叱られることにもなっていたのです。

そんな記憶が一層彼を悲しませました。つまりペトロは挫折し、惨めにも敗北したのでした。しかしこの後、復活の主イエスと出会い、主イエスによって降された聖霊を受ける中で新しいペトロが誕生することとなります。彼が聴衆に語ったのは自分の情熱や宗教的な考えではなく、ただひたすらナザレのイエスのことでした。そしてそれが聖書に残されたのです。聖書はまさに主イエスの出来事、すなわちその言葉・行い・苦難・十字架の死・復活のみを語っています。

聖書の外典「ペテロ行伝」によればペトロは、皇帝ネロのキリスト教迫害下のローマで宣教中に捕らえられ、逆さ十字架の刑によって AD67年に殉教したとされています。ローマから避難する途中のアップア街道でローマへ急がれる主と出会い、殉教を覚悟してローマに引き返したペトロでした。聖霊のバプテスマを受けて新しくされ、「ナザレのイエスと共にいた者」と告白し、恵みの中に生きた「聖ペトロ」の姿がここにあります。

(説教要約 羽入田悦子)